

諦めない
経営術

EARTH CREATE(株) 建設業の枠を越え、将来見据えたインフラ整備に挑戦

土木事業で扱う建築物を手がけていたEARTH CRE
REAT E(株)（本社仙台市青葉区国分町）は、東日本大震災の影響で売り上げが激減。そこから構造物の補修・補強工事を始め、建物

の内装工事や土壌改良材の製造など次々と新たな分野に挑戦し、事業を広げてきた。その背景には、人との縁を大切に、「社員と家族の豊かさの実現」とする安本敬一社長の信念がある。



安本敬一社長

アルミ上屋の製造、建築で独立



水門の上に建てられた上屋（写真提供：EARTH CREATE）

EARTH CRE
EAT Eの事業の始
まりは、アルミ製の
建築物（上屋）の開
発と販売だ。同社は
もともと仙台市の土
木設計事務所である
（株）ブレインズから商
社機能を独立し、創
設構建（株）として20
08年に設立（18
年に社名変更）。前
年にブレインズに入

社していた安本社長は、土木系商社での勤務経験があった。

「水門や樋門の上に設置される上屋を、従来のコンクリート製からアルミ製にすることで軽量化に成功。建築基準法に基づいた接合方法にも対応し、国や自治体のニーズにも応えた」と安本社長。

ブレインズの事務室の一角を借り、営業2人で始めた事業の初年度の売り上げは1億2000万円。競合が全国で2社という環境も追い風となった。数年のう



丸森町にある金栄橋の補修工事（写真提供：EARTH CREATE）

ちに一人体制となったが、「誰かの生活の責任を負わず、一人で気楽にやると思っていた」。

大きな転機は11年の東日本大震災。がれきの撤去や土地の造成など基礎工事が急ピッチで進む一方、上屋などの最終工程の需要は一時的に激減。売り上げは3割以上落ち込んだ。

「上屋だけに頼っていたはいけない」。そう考えた安本社長が目をつけたのが、建屋の下にある樋門の補修工事だった。「トンネルの数は全国で約1万2000本なのに対し、水門、樋門などの河川管理施設は28万、橋は約73万橋に上る。主な材料である鉄やコンクリートを提供するのは大手企業だが、メンテナンス分野であれば中小でも十分に参入できると考えた」。

ただ、市場はすでに出来上がっている。競合他社と差別化するため、EARTH CRE
EAT Eは環境に配慮した材料を使った塗装といった最新技術を持つ企業に参画。土木コンサルタントや官公庁に営業をかけ、公共事業に採用されるための

「種まき」を続けてきた。「設計段階で仕様書に技術が組み込まれるビジネスモデルを築いてきた。当社が扱う環境面や性能に優れた商材や技術が取り入れられることが、社会インフラの礎を支えられると自負する」からだ。



土壌改良固化材は東日本大震災で被災した塩竈市寒風沢島の復興工事に使用された（写真提供：EARTH CREATE）

掛けるようになった。コロナ禍で多くの計画が頓挫したが、徐々に需要が回復。現在では仙台うみの杜水族館や仙台国際ホテルの改装を請け負っている。

解と協力を得て、土地の譲渡を受けた。良い信頼関係を築いており地元雇用の創出で地域に還元していき「い」と熱意を込める。

eパーパーソイルは産業副産物のリサイクル資源を材料とした非セメント系の土壌改良固化材で、植生に配慮した土へ改良できる点が特徴。環境に優しい土壌改良固化材は従来のセメント製品と比較し、環境配慮や強度発現性に課題を抱える建設会社や、CO₂削減に向けた取り組みを必須とする大手企業に絶対求められるという確かな手応えを得ている。

創業から17年。土木と建築の分野にまたがり、メーカーや商社、工場と機能を広げてきた。24年度の決算で売上高4億8000万円を達成し、社員は12人に。「今期の目標は7億6000万円。現役のうちに従業員を50人雇うまで業態を